

くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻

その二

成興寺住職 小倉玄照

索オイオイ

もう四・五年まえのことになりましたか。
私の保育園に二才を過ぎた男児T君が入園して
来ました。ところが、このT君、いささか多動
の傾向があつて行動に落ちつきがありません。
しかし、何よりも私たちを心配させたのは、入
園後、一カ月経つても殆どことばらしいことば
をしやべらないことでした。どんな時にも、た

だ「オイオイ」というだけなのです。

もちろん、両親はそのことに気づいていて、
ひよつとしたら脳に傷でもついているのではな
いか、と大学病院にT君を連れて行き、精密検
査を受けたりしたようです。脳に傷がつくなん
てことはめつたやたらにあることではありませ
ん。実際、脳波などの医学的検査では大した異
常は発見されませんでした。

T君には、五・六才離れた姉が一人いるので

すが、男の児が欲しいと念じ続けていた夫婦の間、やつと念願かなって授けられた男児でした。祖父も、両親も、目の中に入れても痛くないほどに大切に育てたようです。喃語が発声できる頃、自分の要求を「オイオイ」といえば両親も祖父もそのもとめるものをおしはかつて、それぞれそうかそうかと下へもおかぬように対応したようです。まさに「王索仙陀婆」ならぬ「T索オイオイ」です。両親や祖父は、さながらに可愛い王様T君にかしづく家臣たちという家庭の様子が目に浮かびます。

このT君の親に対して私どもは忠告しました。「オイオイ」と云っただけで、水をやったり、おやつをやつたりしないようにしなさい。「水」とか「おやつ」とか、或いは「ご飯」とか、カタコトでもいいから自分の欲しいものを言葉に発するように仕向け、そういう努力の成果をある程度認めて後に、初めてその要求を満たして

やりなさい、と。

家庭内で、そういうように努めてT君に接し始めると、しばらくしたら、彼は必要に迫られてカタコトをしゃべりだし、やがて間もなしに同年齢のこどもたちと同じように会話が出来るようになりました。

智慧を磨く

王と臣という二つの立場を比較してとやかくいうのは、仏法とはなじまないことです。しかし、権力者の王はかなりわがままにふるまうことが可能ですが、王に仕える臣は、自己を相対に抑制しなければその任を全う出来ません。

そういう意味では、もし生まれ落ちた時から、王として常に仙陀婆をもとめ、苦もなくそれを得るような生活ばかりしている者は、所詮「奉仙陀婆」の智慧を身につけることが不可能だと申してよいでしょう。



「索仙陀婆」する王に対して、的確な「仙陀婆」を奉るのは、「有智の臣」であつて初めて可能です。「索オイオイ」する丁児に対して、水やおやつやら、或いは抱っこやらおんぶやら、とその状況に応じて望みをかなえてやれる祖母たちは、かつて厳しい生活環境の中で、そのような智慧を磨いて来たということも出来ま
す。ある意味では「有智の臣」の要素を身につけているのです。しかしながら、幼い時からこういうふうな「索オイオイ」で育つた方の子は迷惑なことです。決して「奉仙陀婆」の智が身につかないのではないかと予想されるからです。

このように考えて参りますと、道元禪師がここで問題にしておられる「智」は、このごろの学校教育などで問題にする「学力」などとはいささか趣きを異にすることがおわかりでしょう。「学力」は、いふなれば言語によって修得し

た知識が中心になるのですが、「奉仙陀婆」の智は、大自然と一体になつて生きる厳しい生活体験の中でたくましくして身につけたものなのです。中々に自己の思いどおりにはならない状況の中で、いつしか身につけた一種の勘のようなものが大きな比重をしめた智と申したらよいかもしれません。

禪門では、「不立文字」とか「教外別伝」とかいうことを強調します。文字や言語によって修得した概念的な知識にふりまわされて生きることを否定的に考えるのです。師に対しては、常に理屈ぬきの勘で反応することが求められたのです。禪門の修行の要諦は、そういう勘をいかにしてわがものにするか、というところにあつたと申してよいでしょう。まさに「奉仙陀婆」の「智」を備えることは、禪門の修行の極意とも言えるのです。

行脚で鍛える

では、具体的にはどういう修行をすれば、「奉
仙陀婆」の「智」が体得できるのでしょうか。

師の心にとっさの勘で反応して誤ることがない
ようになるのでしょうか。その点について、道
元禅師は、

「さらに草鞋を買ひ行脚すること進一歩して始
めて得ん」

と、一つの方向を指示しておられます。行脚
というのは、各地の禅院を尋ねて修行をするこ
とです。つまり、わらじを履いて旅に出てみる、
と云われるのです。

そこで思い出すのが『従容録』は第二十則の
「地蔵親切」という公案です。中国は福建省の
地蔵院に住した珪深和尚（八六七一九二八）が
主人公です。（一）内に会話部分の拙訳を示しな
がら、本則を紹介しましょう。

地蔵、法眼に問ふ、「上座何くにか往く」（お
ぬし、どこへ出かけるのかね）

眼云く、「遙邈として行脚す。」（あちこちに

とどまりながら修行の旅に出ます。）

蔵云く、「行脚のこと作麼生。」（修行の旅を
何と心得ているかね）

眼云く、「不知なり」（見とおせません）

蔵云く、「不知、最も親切なり」（見とおせ
ないというのは、最も親切なことだ）

眼、豁然として大悟す。

法眼は、法眼宗の開祖である法眼文益（八八
五一九五八）のことです。地蔵（珪深）の弟子
です。この会話の眼目は、もちろん「行脚」に
あります。各地をただ一人で遍歴して歩く行脚
が、なぜ人間を鍛えるのか——それがここでは
問題になっています。それに対する答は、
「不知」。いろいろに解釈できそうですが、『学

研漢和大辞典』の「知」の意味として「しる—
物事の本質を正しく見とおす。ずばりと当てる。
感覚や判断・記憶などの働きを含めていう。」と
あるのを参考にして、「見とおせない」という訳
をしてみました。何が起るか見当もつかない
——それが、かつての行脚の本質であったよう
に私は思っているのです。

旅を現代に生きる私どものイメージで考えて
は誤ります。

「可愛い子には旅をさせよ」

ということわざに象徴されているような昔の
旅のことなのです。

「旅は憂いもの辛いもの」

というのが、昔の人にとっては、共通の認識
だったのです。旅が、しばしば人生の比喩とし
て語られたりするのは、行き先にどういふ事態
が発生するのか、殆どその見通しが立たないか
らなのです。

冷暖房完備の汽車や自動車で、殆ど計画どお
りに、いたって快適な旅が可能で現代の旅行と、
昔の旅とは、まったく異質なものであったのです。
もうかれこれ十年前のことになりますが、私
の寺で「小僧安居」という行事を持ったことが
あります。学校の夏休みを利用して、小中学生
の寺院子弟を五・六人集め、一週間ばかり昔の
小僧のような生活をさせてみようという試みて
す。

その時、私は参加する子弟の親御さんに、一
つの条件を出しました。それは、参加者は汽車
で、付添なしにやって来る、ということでした。
名古屋や大阪から、或いは博多や岡山から、子
供たちは一人旅を経験しながら、私の寺へやっ
て来ました。「小僧安居」は、このたった一人で
汽車に乗り、見知らぬ寺へやって来て一週間ば
かり生活するということで、目的の半ばを達し
たのだと、私は今でも思っています。

今、子供達の自立が充分できていないのではないかとということが社会的に問題になっていきます。その原因は、大学入試の時にすら親が付き添って行くのが珍しいことではなくなつたといふことに象徴的に示されています。子供に一人旅を経験させることがなくなつたということが大問題なのです。

法眼が行脚した中国大陸の山河は、想像を絶するほどに広漠としたものでした。そこをただ一人、幾日も幾日も歩きつづける旅を思うてごらんなさい。猛獸やら、或いはよからぬ奴やらが突如現われて危害を加えようとするかも知れません。病氣や怪我をしても、医者などはありません。自分だけがたよりです。まさに荒涼たる大自然の中を大自然と呼吸を合わせながらただ一人旅を続けていくのです。文字通り「不知」の世界を生き続けると申してよいでしょう。そういう中で体得した智慧こそが大切なのです。

師が弟子に何を求めているか、弟子が師のころを正しく読みとる勘のようなものは、そういう生活の継続の中でいつの間にか我が身に備わってくるのです。

親と子が望ましいかたちで心を通わせあえるようになるためには、おたがいがやさしく接触しあうというだけではどうも不十分なように思えます。豊かさの中で、子に「奉仙陀婆」の勘を育てるためにはどうしたらよいか。私どもは、真剣に考えなければならぬようです。

